



No. 1807

一の倉沢四ルンゼ

79年6月16日 (快晴)

(まえがき) 本来ならば、烏帽子奥壁の凹状ルートが我々の予定していたルートであった。しかし、先行パーティーが多数取付いており、時間的な面、そして何よりも落石に対する危ぐから、ルートを三ルンゼに変更した。

(編成) L竹林金一郎、中島三夫、外

園信夫、田中隆

(行動内容) 五ルンゼの出合でアンザイレン、四ルンゼのF滝へザイルを延ばして行く。もろい足場に思いのほか苦戦を強いられたが、ルンゼの傾斜は弱く、スピードは上がった。三ルンゼの出合とおぼしきところに来たが、雪溪等で現況判断を誤まり、そのまま通過してしまった。後続が登り始めようとする、その時、三ルンゼが落石を発した。規模こそさほど大きくはなかつたが、トップを墜落させるには充分であつた。ともかく、ルートファインディングの失敗が、我々を安全へと導いた。

四ルンゼの各滝は厚い雪溪におおわれ、その通過は思いの外、楽なものとなつた。ルンゼの影が浅くなり、ゴロ状をなしてきた。登はん終了は間近い。だが、四ルンゼのどんづまりでは巨大なブロックなだれが形成されつつあつた。その時、我々は通称ノドと呼ばれる場所にいた。このノドの通過があと十数分おければ、我々は四ルンゼに散つただろう。

この時期のルンゼ登はんは、ブロックに対し充分な注意を払う必要がある。

(外園信夫記)